

「安土山記」をよむ

日本史学

私は大学の授業では、学生といっしょに日本史の史料を読んでいます。今回は「安土山記」を読んでみましょう。安土桃山時代に活躍した南化玄興^{なんかげんこう}という禅僧（下に肖像画）が、織田信長の建てた安土城について、おそらく信長に頼まれて記した五山文学といわれる文章の一つです。安土城天守の復元でも参照された有名な作品ですが、長い文章全体を読もうと思う人はほとんどいません。私なら次のように要約します。

天地ができて以来、安土山という山は存在したはずだが、この山の素晴らしさに最初に気づいたのは信長である。大勢の労働者や職人が城造りに参加したが、すべての設計図は信長の胸の内にあった。壮大な石垣や石段は露をうけ潤い、建築の屋根瓦は霜を帯び光を放っている。信^{まこと}は豚魚に及び、威は草木にまで知られている。この山の美しさは、信長に気づかれるために、今日まで残されてきたかのようである。

以上の内容を、みなさんならどう解釈しますか？安土城の建物は今はありませんが、石垣や屋根瓦に光沢を添えた安土山の露や霜は今でも見るができるでしょう。それらを見て、みなさんも信長と同じように安土山の美しさに気づけますか？筆者の南化は、現代の私たちにもそのように問いかけてきているのかもしれません。

それにしても、南化は信長を持ち上げすぎでしょうか。そうでもない可能性はあります。「豚魚」について気になりませんか。これはたぶん、「智は王公^{あざむ}を欺^{あざむ}けても、豚や魚を欺けない。力は天下を得られても、匹夫匹婦（庶民）の心を掴^{つか}めない」という有名な蘇軾の詩文をふまえています。王様（信長？）をあざむくのは簡単だが豚や魚や庶民をだますのは簡単ではない…。こうした深意があったと読んでよいかどうか。まだまだ慎重な検討を要します。

斎藤夏来 教授



絹本着色南化玄興頂相図
（愛知県一宮市・妙興寺所蔵）

身体に耳を傾けて

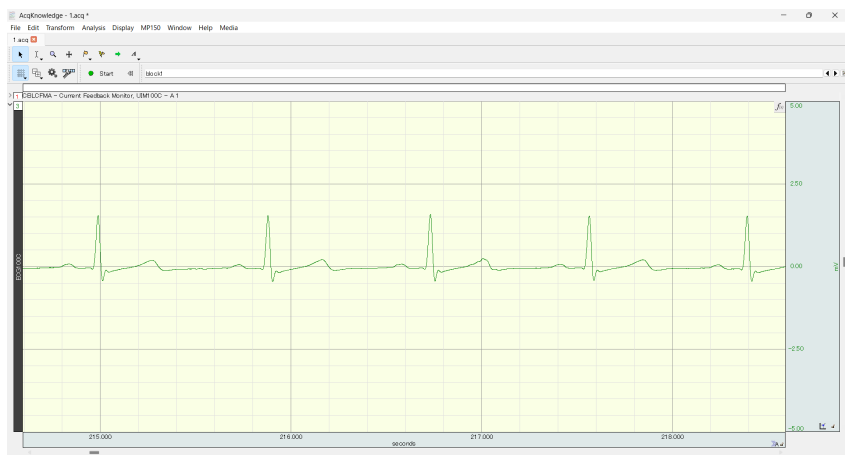
心理学

「悲しいから泣くのではない。泣くから悲しいのだ。」これは、19世紀末の心理学者ウィリアム・ジェームズの感情理論を象徴する言葉です。私たちはふつう、悲しいから涙が出る、怖いから心臓がドキドキすると考えます。しかしジェームズは、出来事に対して生じた身体反応を脳が感じ取ることで、感情が経験されると考えました。心拍、呼吸、胃の動きなど、身体の内側で起きている変化を感じ取る感覚は「内受容感覚」と呼ばれます。ジェームズ以後、心理学や神経科学の分野では、内受容感覚と感情の関係について多くの研究が実施されてきました。例えば、内受容感覚に関わる脳領域と感情経験に関わる脳領域が重複することや、内受容感覚の鋭敏さが感情の感じ方と関連することなどが示されています。こうした研究から、私たちの心は身体と密接に結びついて成立しているとわかります。

心理学専攻では、このような「身体と心の関係」という観点から、人間について探究できます。身体と心のつながりを学ぶことで、自分自身について理解するヒントを得ることもできます。実際私自身も、ここでの学びを通して、自分の身体に意識を向けることが増えました。楽しいとき、悲しいとき、恥ずかしいとき、腹が立ったとき、私たちの身体にはさまざまな変化が起きています。そうした変化に注意を向けると、自分の状態を俯瞰して捉えることができ、安心感につながります。また、自分の内側に注意を向けることは、自身の意識の向き方や考え方の癖に気づくきっかけにもなります。絶えず世界に触れてさまざまなかたちで応答する身体は、私たちが生きていることを実感させてくれる、美しく尊いものであると私は感じています。

忙しい日々の中では、大きな感情の波に呑み込まれそうになることも多々あります。そんなとき、皆さんも自分の身体に耳を傾けてみませんか。

二階堂沙耶 博士後期課程 1年



実際の心拍波形

英語の不思議に魅せられて

英語学

英語を勉強していて不思議に思ったことはありますか？私は元々英語が苦手だったのもあり、英語に対する疑問ばかりでした。大学院に進んだ今も「どうして??」と思ってばかりいます。

「どうして疑問文は前に “do” を持ってくるの？」
「なぜ発音しない “e” が語尾に付いているの？」
「何で “dish” は『料理』という意味にもなるの？」
複雑な文法、不思議なスペル、単語の豊かな多義性など英語には気になることが沢山あります。このような英語という言葉そのものに対する疑問を解決できるのが英語学研究室です。

私もそうでしたが、大学で英語を学びたいと思う人には多種多様な選択肢があります。洋書が好きなら英文学でしようし、英語を話せるようになりたいのならコミュニケーションを中心に学べる所が良いでしょう。そんな沢山の道がある中で、私が名大文学部英語学研究室に入り、そのまま大学院に進んだのは先述したような英語の不思議を面白いと思ったからでした。中高の英語の授業でワクワクした経験がある人は言語としての英語を学ぶのが向いているかもしれません。私は授業を受けていて過去形や進行形、付加疑問文、現在完了進行形など、日本語とは異なるパズルのような英文法を（もちろんテスト勉強には苦心しましたが…）何だかカッコいいと思っていました。使っている文字も、発音も、文法も新鮮に映るからなのでしょう。それはもしかしたら日本語母語話者だから気付ける英語の魅力なのかもしれません。海外の方に言われて知る日本の魅力があるのと同様です。

英語という言葉を学ぶだけではなく、研究する側にもなってみませんか。同じく英語に魅せられた同期や先輩方と過ごす日々は本当にかげがえのないものになると思います。

加藤はな 博士前期課程 1年



学部4年時の卒業論文中間報告



月刊名大文学部

第152号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2026年7月10日発行